

# 箕面公園 昆虫館



ふればひらく自然のとびら



かつて「日本三大昆虫宝庫」のひとつと言われた箕面の森には、1953年から続く『箕面公園昆虫館』があり、毎週末は多くの来館者が訪れる。昨年4月にリニューアルした同館の見どころや現在の活動を紹介します。

## 知れば知るほど驚く 多様性が昆虫の魅力

阪急「箕面駅」から徒歩約15分。木漏れ日の坂道を上っていきくと『箕面公園昆虫館』(以下、同館)が現れた。館内にはたくさんある標本や生きた昆虫たち、映像シアターや触れる模型など、小さな子どもも楽しめる昆虫好きも楽しめる空間が広がる。取材当日は親子連れや大学生らしきカップル、ハイキング姿のシニアなど、幅広い年齢層の来館者で賑わっていた。

今は苦手になってしまった人も、子どもの頃はなぜか夢中で虫を追いかけてたり、飼ったりした記憶があるのではないだろうか。「昆虫の面白さは変わった形や模様、色、生態を持つものがたくさんいるということ、つまり多様性にあります」と話すのは、同館館長の中峰さんだ。

たとえば、と教えてもらったのはアリノタカラという体長1ミリほどの小さな昆虫。一生のほとんどをミツバアリの巣で過ごすというだけでも驚きだが、甘い蜜を出してミツバアリに与え、代わりに身の回りの世話をしてもらうのだそう。持ちつ持たれつの共生関係を結んでおり、女王アリは新しい巣を作るために飛び立つ際、必ずアリノタカラを1匹くわえて行くのだという。「僕からしたら衝撃なんですよ。『こんな生き方してる

んや!」って」と中峰館長。ではそういった多様な昆虫の魅力を、同館ではどのように伝えているのだろうか。

## 小さな子どもたちにも わかりやすく伝える工夫

常設展では身近な昆虫から海外の珍しい昆虫まで、たくさん標本が見られる。しかし昆虫学の分類に沿って紹介するだけではとまらない。標本箱には大きなセミとお好み焼きソースが並んでいた。長いナナフシとリコーダーが並んでいた(表紙右上)。と、コーナーによってはかなり自由。馴染みの薄い外国の昆虫の大きさをわかりやすく伝える工夫だという。

身近な昆虫でも、いつもと違う視点を用意すれば新たな発見がある。生きたアメンボを展示する際の水槽は下にもぐりこめるようになっていて、小さな子どもたちがアメンボの作り出す波紋を見上げていた。「お客さんに驚いてもらえるような、もっと昆虫を好きになってもらえるような切り口をいつも探しています」と中峰館長は話す。

また同館では生体展示にも力を入れている。人気のヘラクレスオオカブトや、近年あまり見られなくなってしまうタガメなどのほか、蝶を間近に観察できる放蝶園は同館の目玉のひとつだ。「亜熱帯

## 昆虫館だからできる 新しい保全活動

来館者の目にはふれにくい活動もある。環境省の依頼で参加した「絶滅危惧昆虫類の生息域外保全モデル事業」は、中国山地でのみ見られる希少な蝶、ウスイロヒヨウモンモドキの保全が目的だ。生息地となる草原が減少し絶滅の恐れがあるため、現地の保全活動と並行して同館が増殖技術への取り組みを始めた。

「飼育技術を持った昆虫館でしかできないことなので、これからは活動を継続していきたい」と中峰館長。現在のところ展示の予定はないが、何らかの形で活動内容を伝えたいと考えている。「希少な蝶だから見せたいんじゃないんです。どうしても希少種になったのか、一般の人にも考えてもらえるようにしたい」と清水副館長。昆虫の多様性を守ることに、これもまた同館の大切な役割だ。



**企画展**  
中峰館長のアイデアで始まることが多いという、ユニークな切り口の企画展。カブトムシやクワガタの仲間がいっぱいの「顎と角展」は9月3日(月)まで



**放蝶園**  
植物にあふれた温室(右写真)を15種前後の蝶が自由に飛び交う。「誰もいない朝早くにここで蝶を眺めていると『天国や!』と思うくらいいい場所」(中峰館長)



**標本展示**  
昆虫学の分類に沿った標本コーナーのほか、「なが」な昆虫を集めた一角も。なぜこんな姿を獲得したのか、考えながら眺めてみては



**ミュージアムショップ**  
文房具やアクセサリ、ポストカードなど、選りすぐりのグッズを販売中。展示を見た後はここで気に入りの昆虫グッズを探してみよう



**昆虫ふれあい**  
生きた昆虫とふれ合える、子どもたちに人気の週末イベント。どの昆虫が登場するかは当日のお楽しみ。開催日や時間帯は公式HPを確認



清水聡司 副館長 中峰 空 館長  
「次の企画展は『伊丹市昆虫館』との合同で、テーマはカマキリ。オーソドックスな展示になる予定です」(中峰館長)「昆虫館に来ると次々疑問が浮かぶはず。大人ほど面白いんじゃないでしょうか」(清水副館長)

の蝶を中心に飼育していて、種類の多さはこだわりです。私たちが暮らす温帯との違いを感じてほしい」と副館長の清水聡司さん。蝶の幼虫は種類ごとに食草が決まっており、餌となる植物はそれぞれ栽培する必要があります。また習性や成長の早さも異なるため、飼育スタッフの労力は大変なものだ。しかし色とりどりの蝶たちが飛びまわれば、難しい説明を抜きにして昆虫の多様性を体感できるはずだ。

週末に開催されたイベント「昆虫ふれあい」では、腕にニジイロクワガタやクワカクゾウムシをとまらせた子どもたちがその動きを食い入るように見つめ、中峰館長にさまざまな疑問をぶつけていた。「手にしがみつく昆虫の力強さや重さ、あるいは匂い。実物の魅力を伝えられるのは昆虫館ならではです」と中峰館長。本や映像を超えた体験は、自然が生み出す生物の豊かさに気づくきっかけとなっている。

**取材協力**  
**箕面公園昆虫館**  
☎ / 072-721-7967  
住 / 箕面市箕面公園 1-18  
営 / 10:00~17:00  
(入館は16:30まで)  
休 / 火曜日(祝日の時は翌平日)  
入館料 / 大人270円、中学生以下無料  
HP / <http://www.mino-konchu.jp>

